

# 主体化の観点からみた 台湾語の“來 (LĀI)”と中国語の“來 (LÁI)”の 〈積極性〉

—台湾語を中心に—

Uì 主體化 ê 觀點來談台語 “LĀI” hām 華語 “LÁI” ê 〈積極性〉:  
以台語為中心

劉 綺紋  
I-bûn LĀU

## 1. はじめに

台湾語の“來 (lái)”と中国語の“來 (lái)”の典型的意味はいずれも、〈移動物が話し手のイマ・ココへと近づく〉という空間領域における物理的移動を表しており、それは英語の“come”や日本語の「来る」の典型的意味と共通している。例えば、例文(1)に示されるように。

(1) 〈台〉 In 規家 lóng 來。(彼ら一家は全員来る。)(教育部國語推行委員會2011、2017/08/08 閱覽)<sup>1</sup>

〈中〉 他們全家都來。(彼ら一家は全員来る。)

しかし、以上の典型的意味以外に、台湾語の“來 (lái)”と中国語の“來 (lái)”は、例文(2)(3)のような、物理的移動を表さない用法もある。

(2) 〈台〉 a. 我來唱歌，你來跳舞。(私が歌を歌い、あなたがダンスをする。)(教育部2011、2017/08/08 閱覽)

b. 逐家來祈禱。(みんな祈りましょう。)(陳修2000: 1061)

(3) 〈中〉 a. 你來唱歌，我來伴奏。(君が歌い、ぼくが伴奏する。)(中日辭典2016: 898)

b. 大家來想辦法。(みんな方法を考えよう。)(現代漢語詞典2016: 772)

このような“來 (lái / lái)”は動詞や動詞フレーズの前に置かれており、その

品詞は通常動詞とされている（台湾語の“來 (lái)”については教育部 (2011) が、中国語の“來 (lái)”については呂叔湘 (1980)、相原茂 (2010)、中日辞典 (2016)、現代漢語詞典 (2016) などが見なしている)。それらの説明は以下のようなものである。<sup>2</sup>

(4) 〈台湾語の“來 (lái)”〉

- a. 教育部 (2011)：動作を行う意欲を表す (表示動作意願) (2017/08/08 閲覧)。
- b. 盧廣誠 (2011)：何かの動作を行おうとすることを表す (表示要做某個動作) (p.253)。

(5) 〈中国語の“來 (lái)”〉

- a. 呂叔湘 (1980)：何かを行おうとすることを表す。“來”を用いなくても同じ意味である (表示要做某事・不用“來”意思相同) (p.309)。
- b. 現代漢語詞典 (2016)：何かを行おうとすることを表す (表示要做某件事) (p.772)。
- c. 興水優 (1980)：その場ですぐにその行為にとりかかるといった積極さが感じられ、「どれどれ」といって体をのりだすような意気ごみをしめします (p.109)。
- d. 香坂順一 (1982)：ある事をしようとする積極性、相手にある行動を発動させる語気を表す (p.721)。
- e. 相原茂 (2010)：積極的に行おうとすることを表す (p.971)。
- f. 中日辞典 (2016)：動作に取り組む積極的な姿勢を示す (p.898)。

つまり、このような〈“來” + 動詞 (句)〉の“來 (lái / lái)”については、動作を行おうとすることを表すとしている文献や、動作を行おうとする意欲を表すとしている文献や、より限定的に、動作を行おうとする〈積極性〉を表すとしている文献などがある、ということである。

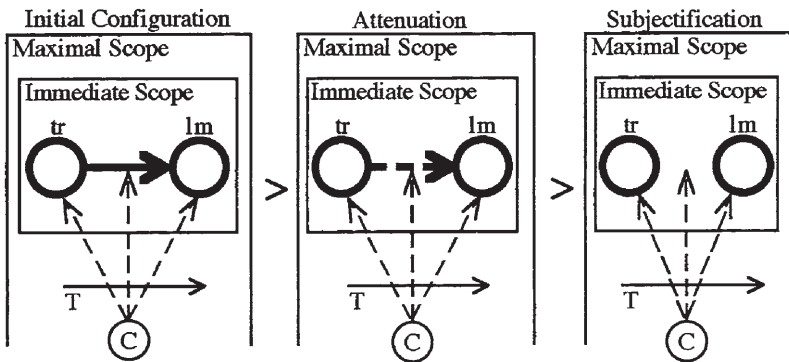
本稿でも、このような台湾語の“來 (lái)”や中国語の“來 (lái)”は一種の積極性のニュアンスを表すと考えている。本稿の目的は、Langacker (1999) で述べている〈主体化 (subjectification)〉の考え方を援用し、“來”の〈積極性〉とその典型的意味の関連性について説明を与えることである。まず次の

第2節では、Langacker (1999) の主体化の考え方について概観し、第3節では台湾語の“來”を中心に、その〈物理的移動〉というプロトタイプの意味から〈積極性〉というニュアンスへの拡張について考察する。第4節では、台湾語の〈積極性〉の“來”の非典型型例について考える。第5節では、台湾語の“來去”という動詞について分析する。

## 2. Langacker (1999) の主体化について

この第2節では、Ronald W. Langacker (1999: 297-299) の〈主体化 (subjectification)〉についての説明を概観したい。その説明に際し、Langackerは以下の3つの図式を用いている。

【図1】 主体化のプロセス (Langacker (1999: 298) による)



これら三つの図式において注目したいのは、〔I〕円C、〔II〕円Cから上に伸びている細い破線の矢印、〔III〕トラジェクターtr (trajector) とランドマークlm (landmark) と3の間における太線矢印の変化、という三箇所である。

まず、〔I〕の円Cは直接スコープ (immediate scope) の枠外に位置しており、それは言語表現においてプロファイルされていない概念化者 (概念主体 conceptualizer) であることを示している。言語表現における主要な概念化者は、話し手と聞き手である。また、〔II〕の細い破線の矢印は概念化者の心的スキヤニング (mental scanning) という概念化の操作を示している。概念化

者がプロファイルされた関係を解釈する際には、必ず言語表現の意味に沿って、トラジェクターをアクセスの開始点とし、そこからランドマークへと心的スキャニングを行う。概念化者の概念化操作（すなわち主体的な関係）は、客体的な関係を概念化するプロセスに内在するものである。〔Ⅰ〕と〔Ⅱ〕はともに、三つの図式においてまったく同じであることから、この二点は主体化のプロセスのいずれの段階でも共通しているということが分かる。

一方、〔Ⅲ〕の太線矢印は三つの図式の唯一の相違点であり、それは主体化のプロセスにおける各段階の変化を示している。矢印の向きは、客体的な非対称性、言い換えれば、トラジェクターが能動的なモノ（典型的には、移動者、動作主、経験者など）であることを示している。そして、矢印は左図の実線から、真ん中の図の破線へ、さらに右図の不在へと変化していく。それにより、主体化のプロセスは、客体的な関係（objectively conceived relationship）およびその関係におけるトラジェクターの役割（trajector's role in it）が、希薄化（attenuation）の中間段階を経て、完全に消えてしまう透明化（transparency）の最終段階（すなわち、最も主体化した段階）へと変化していく、というプロセスであることを示している。その最終段階においてもトラジェクターとランドマークとの関係が成立しているのは、ひとえに概念化者による心的スキャニングという概念化操作に依拠している。

要するに、Langacker（1999）の言う〈主体化〉とは、言語表現の客体的な意味の希薄化に伴って、それに内在していた主体の概念化操作が顕在化する現象である（深田・仲本2008: 175, 177）。<sup>4</sup>

Langackerは、希薄化には少なくとも次の（A）～（D）の4つのパラメーターが関わっているとしている（Langacker 1999: 301-302）。

（A）状態の変化（change in status）：例えば、実際の移動から移動の可能性への変化。あるいは、特定の事物の移動から総称的な事物の移動への変化など。

（B）焦点の変化（change in focus）（その中でも特にプロファイルされる事物の希薄化）：プロファイルがトラジェクターの実際の物理的移動から物理的移動の終着点（final locative configuration）へ変化する場合や、さらには物理

的移動の欠如（物理的移動の脱焦点化（defocusing））へと変化する場合など。

(C) 領域の転換（shift in domain）：物理的領域から社会的あるいは経験的領域への転換など。

(D) 活動の源あるいは潜在力の源の変化（change in the locus of activity or potency）（移動物の変化によるもの）：例えば、焦点化されたオン・ステージの参与者（トラジェクターなど）からオフ・ステージの参与者（聞き手など）への変化。あるいは、特定の移動物から非特定の総称的な移動物への変化など。

以上、Langacker (1999) の主体化の考え方について概観した。次の第3節ではこの考え方を援用し、台湾語の“來”を中心に、その〈物理的移動〉という典型的意味と〈積極性〉というニュアンスとの関連性について説明を試みたい。

### 3. 台湾語の“來 (lāi)”の主体化：〈物理的移動〉から〈積極性〉へ

第3節では、台湾語の“來 (lāi)”の主体化について論じる。まず3.1節では、台湾語“來”の客体的意味の希薄化について考察し、次の3.2節では、その客体的意味の透明化について述べる。

#### 3.1. “來”の客体的意味の希薄化

この3.1節では、台湾語“來”の客体的意味の希薄化について、以下の例文(6) - (8)を通して考えたい。これらの“來”が用いられている文はいずれも、“來”を前項動詞とする〈連動構造〉を持つ。一つの主語に対して、動詞“來”の後にもう一つ（あるいはそれ以上）の動詞（あるいは動詞フレーズ）が用いられており、しかも、それらの動作・行為を行う順序が動詞の語順に反映されている。ただし、例文(6)は二つの動詞の間に場所を示す言語表現が挟まれている〈“來” + 場所 + 動詞（句）〉という構造であるのに対し、例文(7)(8)は場所を示す言語表現が挟まれていない〈“來” + 動詞（句）〉という構造である。<sup>5</sup>

(6) 丞相：……歹勢--honnh, 來 tsia kā 你 tsak-tsō……（丞相：……不好意思呀・來

這裡打擾你……) (丞相:……すまない。ここへお前を邪魔しに来て……) (國王p.77)

(7) 伊 hit ê 城市 ê 後生, 警察來通知 hit 當時, 嚇茫茫 tiàm 路邊 kah 人相爭。(他那個城市的兒子, 警察來通知時, 喝到醉醺醺的在路邊跟別人爭吵。)(彼のあの都会の息子は、警察官が知らせに来た時、酔っ払って道端で人と言いつ争っていた。)(鼠目魚)

(8) a. 第一 ê 人: Óo--ih! Tshòng siánn--lah? (第一個人: 喔--咿! 做什麼啦?)

(一人目: おーい、何をするんだい?)

第二 ê 人: 來念歌--lah! (第二個人: 來唱歌啦!) (二人目: 歌いに来ようよ! / 歌おうよ!) (快樂碳礦夫)

b. Thàn-tiòh 今夜做伙, 燒酒 koh 再乾--一杯。朋友, 來乾--一杯, 乾--一杯! 盡量來嚇 hōo 伊 má-se-má-se。(趁著今晚相聚, 酒再乾一杯。朋友, 來乾一杯, 乾一杯! 盡量給他喝到醉醺醺的。)(せっかく今晚集まっているんだから、もう一杯飲もう。友よ、乾杯、乾杯! 酔っ払うまで思う存分飲もう。)(乾一杯)

まず (6) において、トラジェクター (省略された主語 = 話し手の丞相) は活動の源 (locus of activity) として、実際に言語表現 “來” という物理的移動を行っており、それによってランドマーク “tsia” (ここ) への役割を行使している。端的に言えば、トラジェクターとランドマークとの関係が成立しているのは、言語表現 “來” の物理的移動に依拠している。そして、ランドマークの後にさらに動詞 “tsak-tsō” (邪魔する) が後接し、そのランドマーク (経路の終着点) においてその行為を遂行していることを表している。

次に (7) においては、“來” の後に場所表現はなく、“來” に後続する行動 (“通知”) そのものがランドマークとなっている。その点では (6) と異なるものの、この “來” もやはり物理的移動を表していると直感的に理解される。(6) (7) の “來” はともに最も客体的意味 (すなわち物理的移動) を表していると言える。

では、(8a) の “來” はどうだろうか。この用例は、『多桑』(父さん) という台湾映画のサウンドトラックの中の、“快樂碳礦夫” (楽しい炭鉱夫) という歌が始まる前の掛け声である。二人目の発話において、“來” が “念歌” (歌を歌う) という動詞の前に使われている。この “來” がなぜ興味深いかというと、この “來” には二つの解釈が可能であり、かつ、どちらの解釈が妥

当か判断しかねるからである。

一つ目の解釈は、空間移動を表しているという解釈である。この場合、発話者（二人目）は“來”によって聞き手（一人目）に自分のところへ来てもらうことを述べている。その発話によって、聞き手に来てもらってから、ともに歌を歌おうと誘っているのである。この際、トラジェクター（聞き手）とランドマーク（歌う行為）との関係が成立しているのは、トラジェクターの物理的移動、すなわち客体的移動に依拠している。

二つ目の解釈は、空間移動を表していないという解釈である。この場合は、聞き手がすでに発話者のところにいるなどの理由により、聞き手に対して発話者のところへの移動を要求する必要がない。このような“來”はいわゆる〈積極性〉というニュアンスを表しており、ランドマークの行為を「ともに行おう！」と聞き手へ働きかける、発話者の心的態度が熱心で積極的であることを表している。この際、トラジェクター（聞き手）とランドマーク（歌う行為）との関係が成立しているのは、“來”という言語表現の意味に沿って概念化者が行う心的スキヤニングという概念化操作である。

この“來”がいったい空間移動を表しているのかどうかを確認するために、筆者は映画『多桑』を見直した。残念なことに、映画で二回出てきたこの歌の前にはどちらも掛け声はなく、それはサウンドトラックにしか収録されていない音声だった。<sup>6</sup>そこで、サウンドトラックを片方ずつのイヤホンで聞いてみた。左のイヤホンだけで聞くと、一人目の声はずぐ近くにあったのに対し、二人目の声が遠方から伝わってきたのが聞こえた。右のイヤホンだけで聞くと、逆に一人目の声が遠かったのに対し、二人目の声が近かった。これでようやく、遠方にいた聞き手を話し手が呼び寄せていっしょに歌おうという意図で編集されていることが分かった。この“來”は物理的移動を表しているのである。

しかし、ここまでしないと“來”の解釈を特定できないということは、逆にこの会話の“來”はどちらの解釈も可能だということでもある。また注意すべきは、その“來”が、空間移動の意味を表しているからといって、積極性のニュアンスをまったく排除しているとも言い切れないという点である。

話し手の声はいかにも熱意を込めているように聞こえたし、そもそも空間移動と積極性の両者は共存しうるものである。

次に、(8b) について見てみる。この例には二つの“來”が使われており、それぞれ動詞句“乾--一杯”(一杯乾杯する)と“擘hōo伊 má-se-má-se”(酔っ払うまで飲む)の前に使われている。いずれも“來”によって述べているのは物理的移動ではなく、むしろ積極性だろう。換言すれば、話し手がひたすら熱心に酒を勧めていると解釈される。なぜかという、その前出の発話は「せっかく今晚集まっているんだから」であり、その発話により話し手と聞き手(友人)がすでにいっしょにいることが示されているからである。それにより、話し手が自分へ近づくようにさらに聞き手に要求する必要はないと認識されるのである。しかし仮に、筆者がその直前の発話を引用しなかったとしたら、これらの“來”の解釈はどうなるだろうか。その場合、発話時における話し手と聞き手の物理的な距離が分からなくなり、“來”の解釈は前掲の(8a)と同様に、やはり揺れが出るのではないだろうか。

以上のように分析すると、〈“來”+動詞(句)〉の“來”が物理的移動を表すかどうかは、発話時における話し手と聞き手の物理的距離によって判断できるかのように思われるかもしれない。しかし実は、それは一つの基準に過ぎない。この点について、次の例文(9)で考えてみる。

(9) a. 你來 ká tsia ê 菜炒炒--ê。(你來把這裡的菜炒一炒。)(あなたはこの辺のものを炒めておいて。)

b. 咱逐家門陣來 ká 台灣隊加油！(我們大家一起來為台灣隊加油！)(私たちは一緒に台湾チームを応援しよう！)

例えば(9a)は、炒め物をしている最中の妻がすぐ傍にいる夫に対する発話だとする。この場合、二人の空間的距離はもう十分に近づいているはずである。にもかかわらず、話し手が聞き手へ要求しているのは、次の行動(炒め物をする)の実行だけではなく、発話時における話し手の位置への接近も含まれている。その接近がたとえ一歩だけでも、やはり移動には違いない。

一方(9b)は、国際的な試合でテレビのアナウンサーが視聴者に呼びかける発話だとする。この場合、アナウンサー(話し手)と視聴者(聞き手)と



の物理的距離は離れているはずである。にもかかわらず、その発話は、通常アナウンサーが視聴者に「みんなは一緒に私のところへ来て応援しよう」という意味（すなわち物理的移動を要求する意味）では解釈されず、「みんな一緒に気合いを入れて応援しよう」という意味として解釈されるだろう。

以上の例文を通して、〈“來” + 動詞（句）〉という構造の“來”が必ずしも物理的移動を表すとは限らないことを確認した。では、前掲（7）の“來”が実際の移動を表しているとは即座に解釈できるのは、なぜだろうか。それは、「誰かが（誰かに何かを）知らせる」という行動を述べる文脈において移動動詞が使われている、ということと関係しているのではないと思われる。その行動を実行する前にはまず移動を行うことが多いということが私たちの知識にあり、移動動詞がそのような文脈に置かれたら実際の移動を表すだろうと認知されるからである。要するに、この例文の“來”の解釈は、認知言語学で言う〈百科事典的知識（encyclopedic knowledge）〉によって判断した結果だと言える。

このように、〈“來” + 動詞（句）〉の構造の“來”についての解釈は、しばしば一種の不安定さや揺れの現象を呈している。つまり、物理的移動として解釈される場合もあれば、積極性として解釈される場合もある。また、二つの解釈とも成立する場合もある。それに対し、〈“來” + 場所 + 動詞（句）〉の構造の“來”は空間移動としてしか解釈されない。では、二種類の連動構造の“來”にこのような相違が見られるのは、なぜだろうか。

そもそも、どちらの連動構造においても、“來”に後続する動作・行為がトラジェクターの目的であり、“來”によって表される空間移動（spatial movement）はその目的を実行するために所定の位置に就くためであるに過ぎない。そのため、その空間移動、すなわち客体的移動は焦点から外れる（脱焦点化する）存在となりやすく、それにより客体的移動の希薄化（attenuation）が起りやすい。つまり、第2節で掲げたLangacker（1999:301-302）で言う希薄化に関わる四種類のパラメーターのうちの〈焦点の変化〉と〈状態の変化〉が起きやすいのである。そのため、〈“來” + 動詞（句）〉の構造では“來”の物理的移動の解釈が必ずしも成立するとは限らない。しかし一方、〈“來” + 場所 +

動詞（句）という構造における“來”が客体的移動の希薄化を免れているのは、なぜだろうか。それは、“來”の後に場所を明示する言語表現があり、実際の移動の経路の終着点がプロファイルされているからである。

では、空間移動の意味が希薄化することと意味の変化が起きることとは、どのような関係があるのだろうか。それは、Langacker (1999) の主体化のプロセスによって説明できるだろう。概念化者がプロファイルされた関係を解釈する時には、必ずトラジェクターからランドマークへと心的スキヤニングの概念化操作を行う。言い換えれば、概念化のプロセスにおいては、常に概念化者の心的スキヤニングが内在している。そして、言語表現の客体的意味が焦点化されている場合、それに対する概念化者の心的スキヤニングは顕在化しにくい。一方、言語表現の客体的意味が希薄化してくるにつれ、それまで背後に隠れていた概念化者の心的スキヤニングの側面も自ずから顕在化してくる。それにより、その言語表現の意味も次第に物理的領域から心的領域へとシフトしていき、空間移動から主体的移動 (subjective movement) へと変化していく。つまり、Langacker (1999:302) が言う希薄化についてのパラメーター〈領域の変化〉が起きるのである。〈“來” + 動詞（句）〉という構造の“來”の意味が物理的移動から一種の心的態度・ニュアンスへと拡張されるのはそのためだと言える。

では、“來”の物理的移動の意味と、その心的態度・ニュアンスが積極性であることとは、何かの関連性があるだろうか。一言で言えば、両者は主体化とメタファーによって関連付けられている、ということである。

では、〈“來” + 動詞（句）〉のメタファーとは、どのようなものだろうか。ここでは、走り幅跳びや槍投げなどの競技を想起していただきたい。それらの競技を行う際、スポーツ選手はまず助走をつけて、助走路の終点となる踏切板において跳躍や投擲を行う。競技の記録に直結するのは最後の跳躍や投擲の距離であり、助走のスピードなどではない。すなわち、競技の目的は跳躍や投擲であり、助走はその補助手段であるに過ぎない。そのプロセスは、〈“來” + 動詞（句）〉という連動構造によって表されるプロセス、すなわち、トラジェクターが空間移動を行って、経路の終着点において目的となる動

作・行為を実行するというプロセスに類似しているのではないだろうか。この“來”によって表される〈空間移動〉は、走り幅跳びや槍投げなどの競技における〈助走〉に見立てることができるだろう。

そして、それらの競技において助走を行うのは、それによってエネルギー、つまり運動の勢いが発生するからであり、その運動の勢いによって跳躍や投擲の記録を伸ばすためである。一方、“來”の客体的移動が希薄化することに伴い主体的移動が顕在化してくると、“來”によって表される移動が、物理的領域における空間的経路を辿ることから、心的領域における心的経路(mental path)を辿ることへと変化していく。換言すれば、その〈助走〉は、物理的な助走から心的な助走へと変化していく。また、助走によってつけた運動の勢いも心的な勢いへと変化する。そこで、そのような心的勢いは、実際の発話において、強い意志、高い意欲や熱意、十分なやる気や気合いなど、文脈によってさまざまな積極性のニュアンスとして具現化されることになる。これが、〈“來”+動詞(句)〉という連動構造において積極性のニュアンスが現れる仕組みなのである。

以上、台湾語の“來”において物理的移動と積極性という二つの解釈が可能となる例を通して、前者の意味から後者のニュアンスへの拡張について、Langacker (1999) の主体化の考え方を援用して説明した。Langacker (1999) が述べている“across”と“be going to”の客体的意味の主体化と同様に、台湾語の“來”の客体的意味の主体化についても、移動の主体化と参照点の主体化が関与している。“來”の客体的意味では、トラジェクターの到着点という客体的な地点が参照点(視座)となっているのに対し、主体的意味では、概念化者(のうちの話し手)が主体的に決めた地点が参照点となっているのである。

また中国語の“來”についても、その物理的移動から積極性への拡張について、上述の台湾語の“來”の説明をそのまま援用できると考える。第1節で掲げたように、香坂順一(1982: 721)では、中国語のこの“來”を「ある事をしようとする積極性、相手にある行動を発動させる語気を表す」としている。その説明はこの“來”の特徴を上手くとらえていると言える。<sup>7</sup>

### 3.2. “來”の客体的意味の透明化

3.1節で見た例文の“來”は、物理的な成分がまだ完全に消えているわけではないため、客体的意味の希薄化の中間段階の例だと言える。この3.2節では、“來”の客体的意味の透明化の例について見てみる。

- (10) a. Thàn 我 iáu 少年趕緊來拍拚。(趁著我還年輕趕快來努力)。(ぼくがまだ若いうちに早く頑張ろう。)(向前走)
- b. 我甘願來相信，每一蕊花 lóng 有家己 ê 春天。(我情願相信，每一朵花都有自己的春天)。(僕は心から信じたい。すべての花に自分の春が巡ってくる、と。)(出頭天)
- c. 天色漸漸光，咱 tiō 大聲來唱 -tiōh 歌。(天色漸漸亮了，咱們就大聲來唱歌)。(夜が段々と明けてきた。私たちは大声で歌おう。)(天光)
- d. 豬大兄：Héh héh！讚--lah！咱做伙來起一間上勇、上大間 ê 厝厝！(豬大哥：嘿嘿！太棒了！咱們一起來蓋一間最堅固、最大的漂亮房子！)(大ブタちゃん：へへ！最高！僕らはいっしょに一番丈夫で、一番大きくてきれいな家を建てよう！)(小豬p.44)

これらの例文でも〈“來”+動詞(句)〉という連動構造が用いられている。ただし、いずれの“來”も物理的移動ではなく、〈話し手自身が何かの動作・行為に取り組もうとする際の強い意欲・熱意や高い気合い・意気込み〉などの積極性のニュアンスという一つの解釈しかなされない。これらは“來”の積極性の典型例だと言える。

これらの典型例には、〈“來”+動詞(句)〉というフレーズの動作主が一人称(単数/複数)である、という特徴が観察される。では、動作主が一人称であることと、“來”の解釈に空間移動が排除されやすいこととは、どのような関係があるのだろうか。

台湾語の“來”のプロトタイプの意味は、参照点(視座)を話し手の〈イマ・ココ〉に置き、移動物はその参照点へと近づくという方向の空間移動を行うことである。“來”のこのような典型的な移動方向の特性から、基本的にその移動物は話し手以外のモノだと容易に推測できるだろう。それが、話し手以外のモノが動作主となった場合、物理的移動の成分が残りやすい理由

である。例えば、次の例文(11)の“來”は積極性の解釈も可能だが、物理的移動として解釈される可能性も完全に排除されているわけではない。それは、その動作主が話し手ではないモノ(黒犬)であるということと関係しているだろう。

- (11) 只有一隻跛脚ê烏狗kah伊來做伴。(只有一隻跛腳的黑狗來陪伴她。)(足の不自由な黒犬一匹だけが|彼女の傍にいる/彼女のところに来て傍にいる。)(鳳嬌)<sup>8</sup>

また、前掲(8a)“來念歌--lah”の動作主はやはり話し手以外のモノ(聞き手)であった。その結果、その“來”の解釈も物理的移動と積極性との間で揺れていた。

3.1節で述べたように、そもそも“來”の物理的移動の成分は〈“來”+動詞(句)〉という連動構造に置かれると希薄化が起きやすい。その上で、話し手が動作主となった場合、“來”の移動の方向性により物理的移動の成分の希薄化がいつそう進み、主体化の最終段階である〈透明化〉の段階に至りやすい。つまり、物理的移動の成分の完全なる欠如が起きる。その際、トラジェクターとランドマークとを関連付けているのは、概念化者の心的スキニングという概念化操作だけになる。結果的に、“來”の解釈の不安定性が消え、積極性だけが残ることになる。それが、〈“來”+動詞(句)〉の動作主が一人称の場合、積極性の典型例になりやすい理由である。

ただし注意すべきは、次の例文(12)(13)に示されるように、たとえ〈“來”+動詞(句)〉の動作主が一人称でも、その“來”が物理的移動を表す可能性は残っている、という点である。

- (12) 我來kā你門相共。(我來幫你的忙。)(私は|あなたを/あなたのところへ行って|手伝う。)

- (13) Bâ-á-tsiann:……我來看--你--ah, ah緊開門--ah!(狸妖:……我來看你了, 那快開門啊!)(化けタヌキ:……あなたに会いに来ましたよ。早くドアを開けてよ!)(小紅帽p.14)

まず(12)の“來”は、積極性と物理的移動という二つの解釈とも可能である。後者の解釈が成立するのは、台湾語の“來”の物理的移動の拡張的用法として、聞き手との対話中に参照点(視座)を聞き手の〈イマ・ココ〉へ

と移転することがありうるからである。例えば、よく知られるように、「お宅に行ってもいいですか」と聞き手に尋ねる場合、英語では“May I go to your house?”<sup>9</sup>も、“May I come to your house?”<sup>10</sup>も言うことができる。台湾語も同様に、“去(khi)”(行く)の他、“來”(来る)も使うことができる(劉綺紋2016a)。例えば、(14)のように。

(14) 我 kám ē-tàng {去 / 來} 恁兜? <sup>11</sup> (我可以 {去 / 來} 你家嗎?) <sup>12</sup> (私はあなたの家に行ってもいいですか。)

次に、(13)の“來”は物理的移動という一つの解釈しかできない。この発話は台湾語版の「赤ずきんちゃん」という童話の中の会話文であり、その内容を確認してもトラジェクター(化けタヌキ)がランドマーク(あなたに会う)に近づく物理的移動を実際に行ったことが描かれている。この発話は、前掲の(12)の物理的移動の解釈の場合や(14)と同様に、いずれも聞き手の位置を話し手の移動の到着点とし、話し手が聞き手へ向かっての移動を“來”で述べている。しかし、(13)と(12)(14)とでは相違点もある。

(12)(14)の発話時においては、話し手はまだ出発していない。つまり、その時点における話し手の移動先の到着点は、聞き手の〈イマ・ココ〉しかない。そこで、その物理的移動を“來”で述べているということは、参照点を聞き手の〈イマ・ココ〉に移転し、そこから話し手の近未来の移動を捉えている、ということである。

それに対し、(13)の発話時においては、話し手はすでに聞き手の位置に到着している。ということは、その時点における話し手の到着点は聞き手の〈イマ・ココ〉だけではなく、話し手の〈イマ・ココ〉でもある。そこで、その移動を“來”で述べていても、その参照点を必ずしも聞き手の〈イマ・ココ〉に移転しているとは限らず、話し手の〈イマ・ココ〉に置いたまま、そこから話し手自身の以前の移動を捉えている、という可能性もある。

この点について、それぞれの日本語訳にも注目してほしい。日本語では、聞き手との対話時に、「来る」という移動の参照点を聞き手の〈イマ・ココ〉へ移転できず、話し手の〈イマ・ココ〉に置いたままであればならない(池上2005)。そのため、(12)(14)では「来る」は使えず、「行く」しか使えな

いのである。しかし同様に到着点を聞き手の〈イマ・ココ〉に置きながら、逆に(13)は「来る」によってしか述べられない。それは、話し手がすでに聞き手の位置に到着したからに他ならない。その際、話し手の到着点は話し手の〈イマ・ココ〉であり、それが参照点となり、そこからそれまでの話し手自身の移動を捉えているからなのである。

実は、話し手がすでに到着したならば、その到着点が聞き手の位置にあるかどうかに関わらず、他のいかなる位置にあっても、話し手のそれまでの移動をいずれも“來”や「来る」によって述べることができる。例えば、次の例文に示されるように。

(15) a. 我來看--伊--ah. (我來看他了。) (私は彼に会いに来た。)

b. 我來買 tām-pòh-á suāinn-á niā-niā. (我來買一點芒果而已。) (私は少しマンゴーを買いに来ただけです。)

(15a)において、話し手の到着点は第三者の位置であり、(15b)では、話し手の到着点は明示されていない。それらの物理的移動を“來”で述べているのは、いずれも話し手の到着点が参照点となっているからである。

この節の話をまとめよう。台湾語の〈“來”+動詞(句)〉の動作主が一人称の場合、“來”の物理的移動の方向性により、典型的な〈積極性〉を表す例になりやすい。ただし、物理的移動の解釈の可能性が完全に消えているわけではない。それは、二つの理由による。まず、台湾語の“來”で述べる場合、参照点を対話中の聞き手の位置へ移転することが可能だからである。次に、台湾語の“來”に限らないが、“來”(来る)で述べる場合、話し手がすでに移動の経路の終着点に到着したならば、その終着点が話し手の発話時における〈イマ・ココ〉であり、言い換えれば、参照点となるからである。

#### 4. “來”の〈積極性〉の非典型例について

第4節では、“來”の〈積極性〉の非典型例について考察する。4.1節では、未実現の動作・行為や事態を述べる場合について、4.2節では、すでに実現している動作・行為や事態を述べる場合について考察する。なお、この第4節で挙げる例文のうち、主語が非一人称の場合、その“來”は積極性の解釈以



外に、物理的移動の解釈が可能な例文もある。しかし、この節ではその積極性についてのみ考えることとする。

#### 4.1. 未実現の動作・行為や事態を述べる場合

3.2節で述べたように、積極性の“來”の典型例は、未実現の動作・行為や事態を述べる発話のうちの、一人称動作主の発話である。この4.1節では、未実現の動作・行為や事態を述べる発話のうちの、非典型例について見てみる。それは例えば、以下のような例文である。

- (16) a. 有緣，無緣，逐家來做伙！燒酒咁一杯，hōo ta--lah！Hōo ta--lah！  
(不論是否有緣，大家都同聚一堂！喝杯酒，乾啦！乾啦！)(縁があってもなくても、みんな集まろう。一杯飲もう。飲み干そう！飲み干そう！)(淡水)
- b. 阿水兄，tsia tiō是你生份ê新故鄉，希望你ē-tàng漸漸來認同。(阿水兄，這裡就是你陌生的新故鄉，希望你能漸漸地來認同。)(水兄さん、ここはあなたにはなじみのない新故郷です。あなたには少しずつ受け入れてほしい。)(阿水兄)
- c. 希望祖先-á來保庇，趕緊拍拵成功，ē-tàng轉來去。(希望祖先保佑，趕緊努力成功，能夠回去。)(頑張って成功して早く帰れるように、祖先はお守りください。)(一佰萬)
- d. 希望後世人阮koh ē-tàng來hōo你疼，做你永遠ê孫-á，koh叫你一聲阿媽。(希望下輩子我還能讓你疼愛，當你永遠的孫子，再叫你一聲奶奶。)(来世で生まれ変わった後でもぼくはあなたに可愛がられたい。あなたの永遠の孫になって、もう一度おばあちゃんと呼びたい。)(阿嬤)

まず、(16a-b)について見てみる。辞書や文法書などにおける“來”の積極性の例文は、一人称動作主以外に、(16a)のような「みんな」が動作主の例や(16b)のような二人称動作主の例も多い。<sup>13</sup> 例えば、前掲の(2a-b)や(3a-b)に見られるように。このような動作主を持つ文における“來”は、積極性の解釈以外に、物理的移動の解釈ができる場合もあるため、“來”の積極性の典型性は一人称動作主の文よりは劣る。しかし、使用頻度や想起速度などの基準で判断すると、やはり典型性の高いほうだと言える。では、このような非一人称動作主の文の“來”は、どのような意味での積極性を表す



だろうか。

前述のように、“來”の積極性というニュアンスは、“來”の客体的意味の希薄化に伴って、概念化者の心的スキヤニングという概念化の操作が顕在化したことに由来する。ということは、それによって生じた積極性という心的態度は概念化者のものである、ということが推測できるだろう。ただし Langacker (1999)によれば、主な概念化者とは話し手と聞き手であるとしている (p.297)。では、(16a-b)のような非一人称動作主の文において積極的な意志を持っているのは、話し手だろうか。それとも聞き手だろうか。

実のところ、話し手も聞き手ともに概念化者でありながら、それぞれの役割は異なる。言語表現の選択権を握っているのは話し手のほうであり、発話する時に概念化の操作を行う。それに対し、聞き手は理解する時に概念化の操作を行う。ここではさらに、第1節で掲げた中国語の積極性の“來”に関する呂叔湘 (1980)の記述を思い起こしてほしい。そこでは、「“來”を用いなくても同じ意味である」(p.309)と述べていた。実は、中国語だけではなく、台湾語の積極性の“來”の使用も任意的であり、使用するか否かでその実質的な意味内容も、さらに文法性も変わらない。ということは、積極性の“來”の使用について話し手は完全なる選択権を持っているということである。にもかかわらず、あえて積極性の“來”を用いて述べるということは、話し手がそれによって話し手自身の述べ方・見え方、つまり発話時における心的態度を伝えようとしていることに他ならない。

(16a)において、トラジェクター (みんな)が集まるように話し手が誘いかけている。(16b)では、トラジェクター (あなた)に対して、この場所を新しい故郷として受け入れてほしいという話し手の期待を述べている。いずれも“來”で述べることにより、トラジェクターのそれらの行動に対する話し手の期待や勧誘に、熱意や熱心さといった積極性のニュアンスを持たせている。このような“來”は〈他者が何かの動作・行為に取り組むよう、話し手が働きかけたり期待したりする際の熱意や熱心さ〉というような積極性のニュアンスを表していると言える。

次に、(16c)について考えてみる。(16c)の“保庇”は「祖先・神様が守

る」という意味の動詞であり、この発話によって、祖先に守ってほしいという話し手の願望を述べている。動詞“保庇”の前に“來”を使うことによって、その願望を述べる発話に話し手の熱意というニュアンスを持たせている。その点では前掲(16a-b)と同様である。しかし、両者は相違点も持っている。

(16a-b)では、物理的移動こそ行わないものの、それらのトラジェクターはいずれもランドマークとなる活動の源であった。より具体的に言えば、(16b)のランドマークは“認同”(受け入れる)という心理活動であるため、それに対するトラジェクターが行使できる能動性・意図性・責任などの客体的役割は(16a)ほどではない。(16a)のランドマークは“做伙”(集まる、一緒になる)という物理的な活動なのである。しかし程度こそ異なるものの、そのどちらのトラジェクターもやはりランドマークに対して客体的役割を行使できると言える。つまり、Langacker(1999: 301-302)で挙げている、(A)状態の変化、(B)焦点の変化、(C)領域の転換、(D)活動の源あるいは潜在力の源の変化、という希薄化に関わる四つのパラメーターのうち、(16a-b)はその(A)、(B)、(C)の希薄化にしか関わっていない、ということである。

しかし(16c)においては、(A)、(B)、(C)のみならず、(D)すなわち〈活動の源〉の希薄化にも関わっている。なぜかという、すでに存命していない祖先(トラジェクター)にとって、子孫を守る行為(ランドマーク)に能動性や意図性や責任などの客体的役割を行使できるはずはなく、それはむしろ私たち生きている人間の信仰や想像などによって考えられたものだからである。換言すれば、このトラジェクターはランドマークの源としては拡散的(diffuse)であると言える。

さらに、(16d)は受動文である。その主語の「[ぼく]」は、ランドマークである“hōo 你疼”(あなたに可愛がられたい)の源とは解釈できず、ランドマークの対象と解釈されるため、(16d)は(16c)よりも主体的な意味を表している。では、“hōo 你疼”という受身の動詞句の前に“來”を使ってどのようなものを伝えようとしているのだろうか。それは、この発話も話し手の願望を述べる発話であり、やはり“來”によって話し手がその実現を切に願っているニュアンスを伝えているのである。

この台湾語の例文のような、積極性の“來”が受動文で使用される例は中国語では見かけないのではないだろうか。中国語よりも、台湾語の積極性の“來”のほうが広く使用されていることが観察される。例えば、次の否定文での積極性の“來”の使用も台湾語でしか見かけないだろう。

- (17) 一千年--ah一萬年, m̄-thang來放袂記: 出世是臺灣人, 吃--ê是臺灣米, 為-tiòh団孫為鄉里, 逐家tiòh-愛覺醒。(一千年啊一萬年, 不可以忘記: 出生是臺灣人, 吃的是臺灣米, 為了子孫為了家園, 大家必須要覺醒。) (千年経っても万年経っても、忘れてはいけない。生れは台湾人で、食べるのは台湾の米。子孫のため故郷のため、みんな目覚めなければならない。) (詩響起)

(17) において、〈“來” + 動詞句 (“放袂記”)〉の前に、“m̄-thang” (“毋通” [～してはいけない] [～しないでください]) という、婉曲に言い聞かせたり忠告したり願ったりする意味を表す副詞 (教育部2011、2017/09/17 閲覧) が用いられている。では、この“來”は何を表しているのだろうか。

「忘れる」ことを表す動詞として、台湾語では“袂記得 (bē-ki-tit / bē-ki-tsit / bē-ki-eh など)” (教育部2011、2017/09/17 閲覧) や、“袂記 (bē-ki / buē-ki)” などの表現もあるが、それらは意志動詞にも非意志動詞にもなる。一方、(17) の“放袂記”は「忘れてしまうことをそのままにさせる / する」という意味の意志動詞にしかならない。なぜなら、“放”が「事態や状況をそのままにさせる / する」ことを表す意志動詞だからである。それを否定婉曲命令副詞“m̄-thang”と共起させることにより、「みんな忘れてしまうことをそのままにさせてはいけない」という話し手の言い聞かせ・忠告を述べている。そこで、積極性の“來”を使って、その言い聞かせに話し手の熱意というニュアンスを加えているのである。

以上述べてきたように、未実現の動作・行為を積極性の“來”によって述べる場合、動作主が話し手であるかどうかに関わらず、積極的な意志の持ち主はいずれにしても話し手なのである。

#### 4.2. すでに実現している動作・行為や事態を述べる場合

この4.2節では、すでに実現している動作・行為や事態を積極性の“來”に

よって述べる場合について考える。

- (18) a. 只有一隻跛跛ê烏狗kah伊來做伴。(只有一隻跛腳的黑狗來陪伴她。(足の不自由な黒犬一匹だけが彼女の傍にいる。)(鳳嬌)(前掲(11))<sup>14</sup>
- b. 明知我心內只有你一ê, 為何偏偏對我來反背?(明明知道我心裡只有你一個人, 為什麼偏偏背叛我?)(私の心の中にはあなた一人しかいないのはよく分かっているのに、なんで私を裏切ったの?)(山盟)
- c. 隔轉年阮朋友in爸tiō來出世。(隔年我朋友的爸爸就出生了。)(翌年に早くもぼくの友達のお父さんが生まれた。)(添丁發財)
- d. 感謝天公來落雨, 感謝日頭來曝土。(感謝老天爺下雨, 感謝太陽曬大地。)(お天道さまが雨を降らすのを感謝し、お日さまが大地を照りつけるのを感謝する。)(感懷)
- e. 怨嘆命運來註定, 註定阮是歹命囡。(怨恨悲嘆命中註定, 註定我是個苦命人。)(私が不幸な人と運命づけられていることを恨み嘆く。)(悲情)
- f. 拖磨ê阮身命, 有時在山野。為何來流目屎? 為何ē悲哀?(辛苦勞碌的我, 有時在山野。為何流淚? 為何悲傷?)(こまネズミのように働くおれは、山野にいる時がある。なんで涙を流すだろう。なんで悲しむだろう。)(流浪)
- g. 總督大人: 害--ah! 我ê官印suah來無--去。(總督大人: 糟了! 我的官印竟然不見了。)(総督閣下: しまった! なんとわしの官印がなくなってしまった。)(廖添丁p.54)

中国語の積極性の“來”に対する認識を前提としてこれらの例文を読んだら不思議な感じがするだろう。中国語なら、(18a)を除き、それ以外の発話では積極性の“來”は使わないはずである。しかし、これらは筆者の作例ではなく、いずれも台湾語の歌や童話の中で実際に用いられている用例である。それにしても、そもそもこれらの事態はすでに実現しているため、気合いを入れて実行するよう働きかけたり実現するよう切に願ったりする必要がない。にもかかわらず、やはり積極性の“來”を使うのは何のためだろうか。

まず、(18a)において述べられている行動(彼女の傍にいること)は動作主(黒犬)がすでに実行しているものであり、話し手はそれに関与しておらず、ただ観察者としてそれを述べているに過ぎない。そこで、“來”によって

述べても、その積極的意志の持ち主は話し手ではなく、むしろ動作主のはずである。しかしそうすると、“來”の積極性の由来と矛盾するのではないだろうか。なぜなら、“來”の積極性は、“來”の客体的意味の概念化操作に内在していた話し手の心的スキニングが顕在化したことに由来するからである。

実は、この“來”を使ってプロファイルするのは、その行為についての話し手の見え方や述べ方であり、換言すれば、発話時における話し手の心的態度、すなわち「モダリティ」である。この発話において、あえて積極性の“來”で述べることにより、動作主がその行為を行っている態度がいかにも積極的だと話し手には見えたり、あるいは、まるで動作主がその行為を行っている態度をいかにも積極的であるかのように話し手が意図的に述べたりしているのである。

次に、(18b)の歌詞では、積極性の“來”によって述べているのは、動作主(省略された二人称主語)が行った「話し手を裏切った行為」である。実際、台湾語の歌などでは、誰かの行為・行動が話し手にとって不満や望ましくない場合、その行為・行動を積極性の“來”で述べることが多い。それはなぜだろうか。

その理由は(18a)と同様である。すなわち、動作主がその行為を行う態度が積極的だと話し手には見えたり、あるいはそれを話し手が意図的に述べたりすることにより、動作主のその行為に対する酷さ・心無さ・理不尽さといった批判のニュアンスを含意させ、話し手の辛さ・悲しさ・悔しさ・不平不満・怒りなどの心境や気持ちを暗示させるのである。

行為者の意志・意図を表す表現によって発話者の心的態度を暗示する述べ方は、待ち合わせの場面で相手が遅刻していてまだ到着していない場合、発話者が相手の行為を述べるのに、次の(19a)を使わずにあえて(19b)を使う、ということに類似している。

(19) a. 伊 iah-bē 來。(他還沒來) (彼はまだ来ていない。)

b. 伊 iah-m̄ 來。(他還不來) (彼はまだ来ない。)

(19a)では、否定副詞“iah-bē”(まだ～していない)を使い、「彼がまだ来

ていない」ことをありのまま述べている。一方(19b)では、主語の意志・意図を否定する副詞“iah-m̄”（まだ～しない）を用い、まるで「彼が意図的に来ようとしなない」かのように述べている。後者の述べ方のほうが、彼の行為によってもたらされた話し手の損害や苛立ちがいつそう暗示されるのである。

では、前掲の(18c)はどうだろうか。そのランドマークは“出世”という動作であり、それは日本語の「出世した」という意味ではなく、「(赤ちゃんが)生まれた」という意味である。この発話は友人の父親が生まれたことについて述べている。しかし、“出世”という台湾語の動詞は、受動的な「生まれる」という概念ではなく、むしろ能動的な「(この)世に出る」という概念である。能動性を持っているため、トラジェクター（友人の父親）はそのランドマークの源だと言えるだろう。だからと言って、赤ちゃんがこの世に生まれてくることは果たして意図性や責任を持っていると言えるだろうか。そのように断言するのは難しいため、赤ちゃんであるトラジェクターの客体的役割はやはり希薄化しているだろう。この発話における“來”は物理的移動と積極性という二つの解釈がありうる。前者の場合、トラジェクターの赤ちゃんを能動性を持った移動者に見立てている。一方、後者の場合は、赤ちゃんがこの世界に出ようとした態度がいかにも積極的だというニュアンスを伴わせている。それにより、事態の時間が予想以上に早いことを表す副詞“tiō”（“tō”とも言う）と呼応させているのである。

次に、(18d)では擬人化という比喻を使って、それらのトラジェクターについて自然現象を支配できる能力を持った神様（お天道さま・お日さま）としての動作主と見なしている。比喻的な動作主であるため、それらのトラジェクターのランドマークに対する客体的役割は、前掲(18a-b)に比べて希薄化している。この発話において、ランドマークである行為（「雨を降らす」「大地を照りつける」）を積極性の“來”で述べることにより、まるでトラジェクターがそれらの行為を積極的に行っているかのように述べている。それにより、話し手の感謝の気持ちを述べる発話内容と共に起らせているのである。

(18e)に見られる「運命づけられている」というような内容を述べる場合

も、台湾語では〈“來” + 動詞 (句)〉という連動構造を使うことが多い。では、その“來”は何を表しているだろうか。実は、前述の (18d) に類似し、(18e) の発話も一種の擬人化的な比喩だと見なせるだろう。トラジェクター「運命」を一種の力と見なしており、ランドマーク“註定”(運命によって決まっている)という動詞の前に“來”を使うことで、まるでその運命の力が積極的に自分を不幸な人間にするように決めたかのように述べている。それにより、その運命の力に話し手は逆らうことができない、という含意を持たせているのである。

では、(18f) はどうだろうか。この例文において“來”がランドマークの“流目屎”(涙を流す)という動詞句の前に用いられている。この発話では、“為何”(なんでだろう)という表現から、そのランドマークとしての行動を生み出しているのは、トラジェクターである話し手の意図によるものではなく、何かの漠然とした悲しさ・辛さや無力感のような感情に突き動かされたものだと推測できるだろう。さらに、積極性の“來”があるため、涙が溢れることをコントロールできないというニュアンスを伴っている。この際、ランドマークの源はトラジェクターだけに集中しておらず、拡散している (diffuse) と言える。

次に、(18g) について考えてみよう。(18g) において、トラジェクター(わしの官印)はランドマークである事態(紛失すること)に対していかなる客体的役割(能動性や責任や意図性など)も持てない。しかし、その事態はやはり積極性の“來”で述べられている。では、その“來”は何を表しているだろうか。ここでは、副詞“suah”に注目してほしい。筆者は“suah”を中国語の“竟然”と訳したが、両者はまったく同じというわけではない。中国語の副詞“竟然”が共起するのは予想外の事態や行為であるが、台湾語の“suah”が共起する事態・行為は予想外という特徴のみならず、望ましくないという特徴も同時に備えている場合が多い。例えば、次の例文もそうであり、娥ちゃんがうっかり目を失明させてしまったという事態を“suah”と共に述べている。

(20) 想阮阿娥 -á tuà-tī 化學工廠三個月，一無小心目矚 suah 來失明。(想我的阿



娥待在化學工廠三個月，一不小心眼睛竟然失明ㄉ（うちの娥ちゃんが化学工場で三か月間勤め、うっかり失明してしまったことを思うと。）（船長）

(18g) (20) のように、副詞 “suah” によって修飾された、予想外の望ましくない事態をさらに積極性の “來” で述べ、それらの事態は何らかの勢いによって起きたものであり、とめることができないものであることを表している。それにより、意外性・衝撃性の発話内容と呼応させているのだと考えられる。

このように、実現済みの動作・行為や事態を述べる発話において、積極性の “來” が表すのは、それらの動作・行為や事態についての話し手の発話時の心的態度、すなわち話し手の見え方・述べ方である。動作主が動作・行為を行った態度が積極的であることや事態が起きた勢いが強いことなどが、話し手に見えること、あるいは、それらを話し手が意図的に述べることを表す。それにより、話し手の辛さ・不満・悔恨・感謝・感激などの心境を述べる発話内容や、事態の迅速性・順調性・意外性・衝撃性などを述べる発話内容と呼応させたり、あるいは、以上のような含意・暗示を意味したりするのである。

以上、台湾語の “來” の積極性について考察した。次の第5節では、台湾語の “來去” という動詞における “來” の主体化について述べたい。

## 5. “來去” について

台湾語には、“來” と “去” という二つの動詞からなる “來去 (lâi-khi)” という連動構造の動詞がある。その物理的移動の意味は「ここから離れる」と「行く・どこかへ向かって行く」という二種類であり(教育部2011、2017/10/02 閲覧)、つまり “去 (khi)” (行く) 単独の場合と同様である。では、“來去” における “來” は何を表すのだろうか。この点について、まず “來去” の意味について確認しておこう。

劉綺紋 (2016b) で述べたように、“來去” が表すのは「元の場所から離れて、(どこかへ / 何かをしに) 向かって行く」という物理的移動を行おう、という発話者からの勧誘や発話者の意志) であり、端的に言えば「去 (khi) 」



の物理的移動+発話者の勧誘・意志) という概念を持つゲシュタルトである。例えば、(21a) は勧誘の発話であり、(21b) は意志の発話である。

- (21) a. 大尖哥：行！咱緊來去看-māi--leh。(大尖哥：走！咱們快去看看ㄟ)(大尖兄さん：行こう！ぼくらは早く見に行ってみよう。)(日月潭p.61)
- b. 頭前ê小姐 beh 去 tō-uī? 你慢慢行，我 liām-mi 來去。(前面的小姐要去哪裡？你慢慢走，我馬上過去ㄟ)(前のお嬢さんはどこへ行くんだい？急ぐことはないよ。僕はすぐにそっちへ行くんだから。)(煞到妳)

では、“來去”で述べると必ず意志や勧誘の発話になるのは、なぜだろうか。それも、その“來”の客体的意味が主体化したことに由来するのである。3.1節で述べたが、連動構造〈“來”+動詞(句)〉の前項動詞“來”は、その客体的意味が希薄化しやすい。それは連動構造動詞“來去”の前項動詞“來”も同様である。

まず、次の例文を通して“來去”の〈意志〉の発話について考えてみよう。

- (22) a. 桃太郎：著！無毋著。我--ooh, tō 是一ê人 beh 來去挑戰--伊！(桃太郎：對！沒錯。我啊，就是一個人要去挑戰他！)(桃太郎：そうだ！その通り。僕は一人で鬼に挑戦しに行くんだ！)(桃太郎p.56)

- b. 桃太郎：著！無毋著。我--ooh, tō 是一ê人 beh 去挑戰--伊！

(22a) は日本の「桃太郎」という昔話の台湾語版の中の会話文である。ここで桃太郎は自ら鬼に挑戦しに行くという行動を述べている。この会話で“來去”を使っているのは、意気込みに満ちた桃太郎の態度を伝えるためだと思われる。この点は、(22b) と比べてみると確認できるだろう。(22b) では、“來去”を“去”に置き換えている。その結果、その意味内容こそ変わらないが、話し手の桃太郎の意気込みが小さくなってしまふ感じがする。“去”単独の場合より、“來去”で述べた方がより話し手の意気込みが感じられるのは、“來去”の〈意志〉の発話における“來”が積極性を表すからである。この“來”は、3.2節で見た積極性の典型例の“來”と同様に、その客体的移動も参照点も完全に主体化している。

一方、“來去”の〈勧誘〉の発話においても、その“來”はやはり積極性を表している。ただし、その客体的移動と参照点がともに希薄化しているもの

の、まだ主体化のプロセスの中間段階にあると言える。この点について、次の例文を通して考えてみたい。

- (23) a. 你去食桌--lah! (你去喝喜酒啦!) (あなたは披露宴に行きなさいよ!)
- b. 你來去食桌--lah! (你和我一起去看喜酒啦!) (あなたは私と一緒に披露宴に行こうよ!)

(23a)の“去”の発話は、トラジェクター(聞き手)が披露宴に行くよう話し手が勧めていることを表している。一方、(23b)の“來去”の発話は、まず「話し手が披露宴に行く」という前提があり、その上で「トラジェクターも一緒に行く」ことを話し手が勧めていることを表している。それは、トラジェクターが目的地へ移動する前にまず話し手のところに来て待ち合わせて行くという意味ではない。すなわち、トラジェクターが空間的経路を辿って話し手へ近づいていく必要はなく、その“來”は物理的移動を表していない。ということは、その“來”の客体的意味はすでに希薄化している、ということである。その一方、トラジェクターは話し手と目標を共にしている。換言すれば、トラジェクターは心的世界において心的経路を辿って話し手へ近づいていくということであり、“來”によって表される移動とその参照点の痕跡はまだ心的領域に残っている、ということである。つまり、“來”の客体的意味はまだ透明化しておらず、主体化のプロセスの中間段階にあるのである。

## 6. おわりに

本稿では、台湾語の“來”を中心に、その〈物理的移動〉という典型的意味から〈積極性〉というニュアンスへの拡張について、Langacker (1999) が述べている主体化のプロセスを援用して説明を試みた。その結果、その拡張は主体化とメタファーが関与している、ということが明らかになった。

〈“來” + 動詞(句)〉という連動構造においては、動詞(句)によって表される動作・行為がトラジェクターの目的であり、“來”によって表される空間移動はその目的を実行するために所定の位置に就くためであるに過ぎない。そのため、その空間移動(客体的移動)は脱焦点化しやすく、意味の希薄化が起りやすい。そして、概念化のプロセスにおいては常に概念化者の

心的スキヤニングが内在しているため、言語表現の客体的意味が希薄化してくるにつれ、それまで背後に隠れていた概念化者の心的スキヤニングの側面が顕在化してくる。それにより、その言語表現の意味も物理的領域から心的領域へとシフトしていき、空間的経路を辿ることから心的経路を辿ることへと変化していく。

さらに、〈“來” + 動詞 (句)〉によって表されるところの、トラジェクターが物理的経路を辿り、その経路の終着点において目的となる後続の動作・行為を実行するというプロセスは、走り幅跳びや槍投げなどの競技のプロセスに類似している。それらの競技を行う際、スポーツ選手は、まず助走をつけて、助走路の終点となる踏切板において目的となる跳躍や投擲などの動作を実行するのである。つまり、〈“來” + 動詞 (句)〉の“來”によって表される〈空間移動〉は、走り幅跳びや槍投げなどの〈助走〉に見立てることができる、ということである。そして、それらの競技において助走をつけるのは、それによってエネルギー、すなわち運動の勢いが発生するからである。その運動の勢いを跳躍力や投擲力に変えるためである。

一方、〈“來” + 動詞 (句)〉という連動構造において、“來”によって表される移動が、空間的経路を辿ることから心的経路を辿ることへと変化するということは、その〈助走〉が、物理的な助走から心的な助走へと変化する、ということである。また、助走によってつけた運動の勢いも心的な勢いへと変化する。そこで、そのような心的勢いは、実際の発話において、強い意志や意欲、高い気合いや熱意など、文脈によってさまざまな積極性のニュアンスとして具現化される。これが、〈“來” + 動詞 (句)〉という連動構造において、“來”が〈物理的移動〉から〈積極性〉へと拡張される仕組みなのである。

また、以上のことについては、台湾語の“來 (lái)”だけではなく、中国語の“來 (lái)”にも同じことが言える。“來 (lái / lái)”の主体化は、移動の主体化と参照点の主体化に参与しているのである。

ただし、台湾語の積極性の“來”の用法は中国語よりはるかに多彩である。台湾語においては、未実現の動作・行為や事態のみならず、実現済みの動作・

行為や事態を述べる用例も多く見られる。どちらの場合も、台湾語の積極性の“來”で述べる発話のうち、トラジェクターがランドマークに対して客体的役割を行使しておらず、ランドマークの源ではないものまでもある。つまり、台湾語の積極性の“來”の主体化には、Langacker (1999) の言う (A) 状態の変化、(B) 焦点の変化、(C) 領域の転換、(D) 活動の源の変化、という四種類の希薄化のいずれもが関わっている。

また、台湾語には“來去”という連動構造の動詞があり、その“來去”によって述べると、必ず話し手の意志や勧誘の発話になる。それは、その“來去”の“來”も主体化しており、積極性を表しているからである。ただし、“來去”の〈意志〉の発話と〈勧誘〉の発話とでは、それぞれの“來”の主体化の程度は異なる。“來去”の〈意志〉の発話において、その“來”は積極性の典型例の“來”とまったく同様であり、客体的意味は完全に主体化する。一方〈勧誘〉の発話では、その“來”の客体的意味はまだ主体化のプロセスの中間段階にある。

以上、台湾語を中心に、“來”の〈積極性〉について Langacker (1999) の主体化の観点から説明した。

## 注

<sup>1</sup> 〈台〉は台湾語の文、〈中〉は中国語の文の意。以下同じ。例文の下線は筆者による。日本語訳も基本的には筆者によるが、引用文献に日本語訳が付いている場合は、それに基づく。なお以下、“教育部國語推行委員會 (2011)”を“教育部 (2011)”と略称する。

<sup>2</sup> “來 (lái / lái)”が動詞句 (もしくは介詞句) と動詞 (動詞句) との間に置かれ、前者が方法・態度を表し、後者が目的を表す、という用法もある。例えば中国語の“準備用強攻來戰勝對手” (強攻して相手に打ち勝つつもりだ) (相原茂2010: 971) や、台湾語の“泡咖啡來啣” (コーヒーを入れて飲む) (盧廣誠2011: 253) のように。本稿ではそのような“來”を取り扱わない。

<sup>3</sup> トラジェクター (trajector) とランドマーク (landmark) はいずれも Langacker の用語である。両者は (動詞などを使った) 関係を示す叙述 (relational predication) において関連付けられる、2つの参与者である。トラジェクターはこの関係において最も顕著な参与者である。一方、ランドマークはトラジェクターの次に顕著な参与者であり、複数存在することがありうる (Langacker 1991: 549, 555、深田・仲本2008: 41-42)。「両者は、図 / 地の関係から言えばいずれも図であり、その違いは顕著さの違いだけである。典型的な移動事態においては、トラジェクターは移動物、ランドマークはその移動の経路を特定す

- る参照物である」(深田・仲本2008: 41-42)。
- <sup>4</sup> ただし、深田・仲本(2008)が述べているように、「Langackerの言う“subjectification”は、厳密には、事態の中に入り込んでその事態を解釈していく主体の認知プロセスを表すようになるという意味での「主体化」と、それを介して構築される主体の主観を表すようになるという意味での「主観化」の両方を含んでいる」(p.172)。
- <sup>5</sup> 第3節以降の例文はいずれも台湾語の例文である。例文の後の括弧の中は、それぞれ筆者による中国語訳と日本語訳である。また、出典がある場合は、その略記号をさらに後ろに付けてある。本稿で引用した用例の出典のうち歌やCDブックなど音声がある場合で、もしその音声で歌詞カードなどの印刷物と一致しない場合は、本稿末尾の用例出典欄に挙げてあるアルバムなどの中に収録された音声に準拠する。印刷物に依拠しない理由は、台湾語の正書法がまだ確立されていなかったりするなどの理由により、印刷物における台湾語文の表記が音声と完全には一致しないものが多いからである。ただし、用例出典欄における作品タイトルおよび、用例末尾のカッコ内における作品タイトルの略記号は、検索の便宜上印刷物通りの表記にする。また、本稿の台湾語表記は漢字とローマ字の交じり書きを用い、その漢字とローマ字はいずれも教育部(2011)に基づく。句読点については、歌詞カードには句読点がないためいずれも筆者による。本の句読点も修正することがある。なお、論文末の用例出典欄に挙げてあるCDアルバムは、筆者が準拠したものに過ぎず、必ずしも歌の初出とは限らない。
- <sup>6</sup> この歌は、台湾語歌詞を付けた作詞家兼歌手の文夏氏のバージョン(「快樂的炭礦夫」1958)を初め、多くの歌手によって歌われてきた。しかし筆者が知っている限り、例文(8a)の掛け声が収録されているのは、『多桑』のサウンドトラックバージョンのみである。
- <sup>7</sup> 本稿では議論する余裕はないが、台湾語でも中国語でも〈“來”+動詞(句)〉のみならず、動詞(句)が後接していない単独の“來”も積極性を表す場合がある。例えば、話し手が同じテーブルを囲んでいる聞き手に対して“來!(乾杯!)”や“來來來!(乾杯!乾杯!)”と言う場合がそうである。
- <sup>8</sup> 第1節で見たように、興水優(1980: 109)では、中国語の“來”の積極性について「その場ですぐにその行為にとりかかるといった積極性が感じられ、「どれどれ」といって体をのりだすような意気ごみをしめします」と説明している。中国語の“來”も台湾語の“來”も、確かにそのようなニュアンスを表す場合も多いが、しかし異なるニュアンスを表す場合もある。例えば、例文(11)の“來”は台湾語でも中国語でも物理的移動の解釈と積極性の解釈が可能である。しかし積極性の解釈の場合でも、「すぐにその行為にとりかかる」というニュアンスを表さない。なぜなら、その事態(彼女の傍に居ること)はすでに実現しているからである。積極性の“來”の具体的なニュアンスは、ランドマークである動作・行為の動作性やアスペクト的意味、ランドマークに対するトラジェクターの役割、トラジェクターの動作主性、などの要因によって総合的に決まるものである。
- <sup>9</sup> 例えば、次の用例がある。“‘May I go to your house?’ asked Lizard and they replied affirmatively.” (American: 381)や、“‘May I go to your house... and meet your parents?’ I nodded and lowered my head.” (Skin: 234)など。
- <sup>10</sup> 例えば、次の用例がある。(発話者が聞き手のオフィスにいる時)“‘Your appointment will

be here soon. We have much to talk about. May I *come* to your place tonight?” (Truth: 206) や、(電話で) “‘Great news,’ Andrew responded. ‘Tim’ll be surprised. May I *come* to your office to discuss the trip?...’” (Stay: 273) など。

- <sup>11</sup> 台湾語はさらに“我 kám ē-tàng 來去恁兜?” と言えるように、“來去”も使うことができる。“來去”については劉綺紋(2016b)および本稿第5節参照。
- <sup>12</sup> この点について、中国語では“來去”は使えないが、“去”や“來”を使うことができる。中国語の“來”の用例として、例えば次のようである。「尙志勇・我要來你家吃回鍋肉」(錢江晚報2014/2/11/03:59、2015/09/04閲覧。なお原文は簡体字で表示されているが、本稿では繁体字に直している)。
- <sup>13</sup> “逐家”(みんな)と前掲(10c-d)の“咱”は、いずれも聞き手を含む複数の人間を指している点で共通しているが、“逐家”が必ずしも話し手を含むとは限らないのに対し、“咱”は包括型(inclusive)の一人称複数の人称代詞のため、必ず話し手も含む。
- <sup>14</sup> (18a)は前述のように、その“來”は物理的移動の解釈も成立するが、第4節の冒頭で述べたように、ここではその積極性についてのみ考える。

## 【参考文献】

- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 2, *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 相原茂(編)2010.『講談社中日辞典』(第三版), 東京: 講談社。
- 池上嘉彦2005.『言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標(2)』『認知言語学論考』(No.4, 2004), 山梨正明他(編), 東京: ひつじ書房, 2005, pp. 1-60.
- 教育部國語推行委員會(編輯)2011.『臺灣閩南語常用詞辭典』(中華民國100年7月臺灣學術網路正式版), [http://twblg.dict.edu.tw/holodict\\_new/index.html](http://twblg.dict.edu.tw/holodict_new/index.html), 臺北: 教育部。
- 香坂順一1982.『現代中国語辞典』(初版), 東京: 光生館。
- 輿水優1980.『中国語基本語ノート』東京: 大修館書店。
- 中國社會科學院語言研究所詞典編輯室(編)2016.『現代漢語詞典』(第7版), 北京: 商務印書館。
- 陳修(編著)2000.『臺灣話大詞典』(二版), 臺北: 遠流出版。
- 深田智・仲本康一郎2008.『概念化と意味の世界: 認知意味論のアプローチ』東京: 研究社。
- 北京商務印書館・小学館(共同編集)2016.『中日辞典』(第3版), 東京: 小学館。
- 劉綺紋2016a.「台湾語の“來去(LÂI-KHÌ)”と主体化(上)」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』50: 133-165.
- 劉綺紋2016b.「台湾語の“來去(LÂI-KHÌ)”の概念と意味」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』51: 1-33.
- 呂叔湘(主編)1980.『現代漢語八百詞』(第1版), 北京: 商務印書館。
- 盧廣誠(編著)2011.『實用台語詞典』臺北: 文水出版社。

## 【用例出典】（下線部は略記号）

- Bradman, Tony. (ed.). 2004. *Skin Deep*. London: Penguin Group.
- Brown, R. Glenn. 2014. *The Truth Seekers*. Bloomington: AuthorHouse.
- Green, Thomas A. (ed.). 2006. *The Greenwood Library of American Folktales*. Vol. III. Westport: Greenwood Press.
- Newbegin, Ian. 2012. *Stay: All Is Not What It Seems*. Houston: Strategic Book Publishing and Rights Co..
- 錢江晚報2014/2/11/03:59. [http://qjwb.zjol.com.cn/html/2014-02/11/content\\_2528650.htm](http://qjwb.zjol.com.cn/html/2014-02/11/content_2528650.htm).
- 《CDブック》
- 許明傑・林振生（製作）2008.『給孩子們的世界童話 台語有聲書』臺北：寶島新聲廣播電台FM98.5。
- 林瓊美（製作）2007.『給孩子们的台灣民間故事 台語有聲書』臺北：寶島新聲廣播電台。
- 「義俠廖添丁」『給孩子们的台灣民間故事 台語有聲書』pp. 45-56.
- 「國王的新衣」『給孩子們的世界童話 台語有聲書』pp. 67-87.
- 「三隻小豬」『給孩子們的世界童話 台語有聲書』pp. 25-44.
- 「小紅帽」『給孩子們的世界童話 台語有聲書』pp. 7-23.
- 「日月潭傳說」『給孩子们的台灣民間故事 台語有聲書』pp. 57-66.
- 「桃太郎」『給孩子們的世界童話 台語有聲書』pp. 45-66.
- 《歌》
- 「阿水兄」（歌手：邵大倫，作詞：陳東賢，作曲：許明傑）『三聲再無奈』臺北：華特國際音樂，2015.
- 「阿爸的虱目魚」（歌手：蕭煌奇，作詞：武雄，作曲：蕭煌奇）『思念會驚』臺北：華納國際音樂，2011.
- 「阿嬤的話」（歌手：蕭煌奇，作詞作曲：蕭煌奇）『真・情・歌』臺北：黑色吉他音樂工作室，2007.
- 「一佰萬」（歌手：新寶島康樂隊，作詞作曲：陳昇）『台客搖滾百萬驚險輯』臺北：滾石國際音樂，2006.
- 「快樂破礦夫」（歌手：蔡振南，作詞：文夏）『多桑電影原聲帶』臺北：飛碟唱片，1994.
- 「快樂的炭礦夫」（歌手：文夏，作詞：文夏）『文夏歌唱集』（AL-276），臺南：亞洲唱片，1958.
- 「乾一杯」（歌手：葉啟田，作詞作曲：余隆華）『想厝的心情』臺北：吉馬唱片，2013.
- 「講什麼山盟海誓」（歌手：黃乙玲，作詞：陳國德，作曲：吳晉淮）『山盟海誓精選重唱+新歌』臺北：上華國際，2000.
- 「向前走」（歌手：林強，作詞作曲：林強）『向前走』臺北：滾石唱片，1990.
- 「煞到妳」（歌手：伍佰，作詞作曲：伍佰）『樹枝孤鳥』臺北：魔岩唱片，1998.
- 「詩響起」（歌手：王俊傑，作詞：武雄，譜曲：王俊傑）『詩・響起』臺北：馬拉音樂，2013.
- 「出頭天」（歌手：五月天，作詞作曲：阿信）『後青春期的詩』臺北：相信音樂，2008.
- 「誠心來感懷」（歌手：蕭澤倫，作詞作曲：蕭澤倫）『吃飯皇帝大』新北：傻人音樂，2011.
- 「船長要抓狂」（歌手：新寶島康樂隊，作詞作曲：陳昇）『台客搖滾百萬驚險輯』臺北：滾石國際音樂，2006.
- 「添丁發財」（歌手：王俊傑，作詞：武雄，譜曲：王俊傑）『詩・響起』臺北：馬拉音樂，2013.



- 「島嶼天光」(歌手:滅火器,作詞作曲:楊大正)『島嶼天光』臺北:有料音樂,2014.
- 「悲情的運命」(歌手:蔡秋鳳,作詞作曲:蔡振南)『侯孝賢電影家族』臺北:滾石國際音樂,1998.
- 「鳳嬌姆仔的彼擔米粉炒」(歌手:王俊傑,作詞作曲:王俊傑)『有土詩有才』臺北:馬拉音樂,2011.
- 「流浪之歌」(歌手:蔡振南,作詞:文夏)『多桑電影原聲帶』臺北:飛碟唱片,1994.
- 「流浪到淡水」(歌手:金門王·李炳輝,作詞作曲:陳明章)『伊是咱的寶貝』臺北:陳明章音樂,2004.
- 《映画》  
吳念真(編劇·導演)1994.『多桑』臺北:龍祥電影製作 / 臺北:長澍視聽傳播。